

医師と医師会を結ぶ情報紙

令和4年10月15日／毎月1回15日発行

都医

ニュース

NEWS

Vol.
680

発行所 ■ 公益社団法人 東京都医師会 〒101-8328 千代田区神田駿河台2-5 TEL. 03-3294-8821(代) 定価 ■ 1部77円

「東京在宅医療塾」在宅医療の魅力をじっくり伝えるシンポジウム	01
底流／地区医師会長連絡協議会報告 ほか	02
令和4年度 関東甲信越医師会連合会	03
TMA近未来医療会議 第2回 公開シンポジウム ほか	05
地区医師会新会長紹介 ほか	06
みどりの広場 ほか	07
ふれあいポスト	08
都医からのお知らせ ほか	09
地区医師会長からの一言	11



田園調布駅 旧駅舎

東京在宅医療塾 在宅医療の魅力をじっくり伝えるシンポジウム



西田理事、迫村氏、町氏、大石氏

都内医師ほか医学部生も対象に在宅医療の魅力を発信

東京都医師会では、これから在宅医療をはじめたいと考える会員あるいは在宅医療を始めたばかりの会員を対象として、平成29年度より「東京在宅医療塾」を開催している。在宅医療に取り組む地域のかかりつけ医を養成するための研修であり、座学だけでなくシミュレータを用いた実習も行ってきた。

5期目となる今年度は体裁を変え、講義に先立ち在宅医療の魅力を伝えるためのシンポジウムを開催することとした。本シンポジウムは、若い時から在宅医療について関心を持ってもらうことを目的として、東京都内の診療所・病院に勤務する全職種だけでなく、医学部生も対象とした。

医療の重要性と魅力について述べた。

ディスカッションを行った。東京都では、今後も高齢者が増加し続ける。誰でも年齢を重ねれば「足腰が悪くなり、通院が辛くなる時がある。かかりつけ患者が通院困難となった時に、在宅でも引き続き診療していただきたいと考えている。東京在宅医療塾はそのための取り組みの一つであり、今後も継続して開催する予定である。多くの会員の参加をお待ちしている。

町 聖子氏（フリーアナウンサー）は「看取りに求められる『覚悟』と『決断』に住み馴れた地域で最期まで」と題して講演した。母親の在宅療養の中で、在宅療養を選択した自分達は正しいのかを自問しながら、納得に至るまでの家族の葛藤を中心に語った。在宅療養を肯定できたのは、訪問入浴時の母親の安心した顔を見た時とのことであった。在宅療養をサポートする家族は多くの不安を抱え、在宅療養を決定するのは覚悟を要することを示した。

大石 佳能子氏（株式会社メデイヴァ代表取締役）は「在宅医療の経営的魅力と始め方」と題し、在宅医療の経営上の利点や開始するときのポイントを解説した。

またシンポジウムの最後には、講師陣と西田伸一理事が実際の在宅医療の現場での経験を通じて、在宅医療の魅力を伝えるためのシンポジウムは9月10日（土）にオンライン形式で開催され、在宅医療について異なる立場にある3名の講師が講演した。迫村泰成氏（牛込台さくら内科院長）は「町は驚きに満ちている在宅医療のすすめ」と題して、自身が在宅医療を始めたきっかけや、実際の在宅医療の現場での経験を通じて、在宅医療の魅力を伝えるためのシンポジウムは9月10日（土）にオンライン形式で開催され、在宅医療について異なる立場にある3名の講師が講演した。

町 聖子氏（フリーアナウンサー）は「看取りに求められる『覚悟』と『決断』に住み馴れた地域で最期まで」と題して講演した。母親の在宅療養の中で、在宅療養を選択した自分達は正しいのかを自問しながら、納得に至るまでの家族の葛藤を中心に語った。在宅療養を肯定できたのは、訪問入浴時の母親の安心した顔を見た時とのことであった。在宅療養をサポートする家族は多くの不安を抱え、在宅療養を決定するのは覚悟を要することを示した。

※東京在宅医療塾の講義テキストと動画は本会ホームページに随時公開されます。閲覧には会員登録のID、パスワードが必要となるため、不明な場合は所属の地区医師会へ問い合わせください。



第5期「東京在宅医療塾」カリキュラム

第1回 2022年10月8日（土）

「通院困難になった高齢者への在宅医療」

- ① 認知症ケア
- ② 脱水、感染症の在宅での治療
- ③ 摂食嚥下機能支援（医科歯科連携）

第2回 2022年11月26日（土）

「在宅医療における連携」

- ① 医療介護連携（地域の水平連携）
- ② 病診連携（入退院支援）
- ③ 診診連携（24時間体制）

第3回 2022年12月10日（土）

「終末期がん患者への在宅医療」

- ① 人生の最終段階におけるコミュニケーション
- ② 緩和ケア
- ③ 鎮痛療法

* 各日とも、15:00～17:00

* 内容が変更になる場合もあります

底流

診療科とかかりつけ医としての役割について

最近、かかりつけ医についての議論が活発になされているが、診療科とかかりつけ医として果たすべき役割について考えてみた。

最近、新型コロナウイルス感染症の対応をきっかけに、かかりつけ医についての議論が活発になっている。しかし、感染症を絡めてかかりつけ医を制度化しようという議論には、その名称が適切であるかどうかを含め、違和感を覚えるを得ない。

ところで、私の診療科はいわゆるマイナー科の一つである眼科である。発熱を伴う患者の診療は行わないものの、発熱そのものの対応を行う診療科ではない。

「患者は自院が休診の時などいろいろな眼科を受診している。まさにフリーアクセスであり、必ずしも特定のかかりつけ医療機関を希望しているわけではないのではないか」と発言したところ、「それはかかりつけ医療機能果たして

医療政策は「予防医療、健診体制のさらなる充実」「新型コロナウイルス感染症をはじめ新興・再興感染症対策のさらなる充実」「フレイル・認知症に対する積極的な予防施策の展開」「自宅療養、自宅待機者への健康観察を含む支援事業や往診体制のさらなる充実」「救急災害医療のさらなる充実」「外国人に対する医療提供体制整備の推進」「東京総合医療ネットワークのさらなる充実」「東京都福祉保健局に新設された病院支援部の中に民間病院を支援する部門の創設」としている。

本要望は、東京都福祉保健局長を通じて東京都知事に提出した。また、都議会自民党、

地域の連携・情報の共有により、切れ目のない医療提供体制を構築することは、かかりつけ医が果たすべき機能の一つとして大切なことである。

その連携体制について考えてみると、医療機能の異なる医療機関(病診あるいは病病)間の連携、いわゆる「垂直連携」については、ある程度進んできている。一方で、同じような機能を持つ病院や診療所同士の連携、特に同種の「水平連携」を進めることは、お互いがライバルであることから容易ではない。しかし、医療の継続のためにも、医療情報のデジタル化・共有化と共に、迅速に取り組みを進めていかなければならない。

また、今回の新型コロナウイルス感染症への対応についてであるが、さまざまな理由

で診療・検査医療機関になれないところもある。しかし、例えば自院で対応できなくとも、ワクチン接種会場やPCR検査センターへの出務、自宅療養者の健康観察のサポートなど、できることは少なくない。

結局、かかりつけ医として果たすべきことは、診療科が何であるかには関係がない。病気を診る主治医としてだけでなく、自分の専門性を超えて患者の相談を受け、(検診・学校保健・医師会活動などを通じて)地域医療に貢献すること。時には苦手なライバル同士が手を携え、地域での連携・情報共有を進めること。そして何よりも大事なことは、地域を支える医療者としてのマインドを持つことである。

(佐々木聡)

地区医師会長連絡協議会報告

令和4年9月16日(金)

新地区医師会長の紹介があり、加藤一彦会長(北多摩)から挨拶があった。

◎都医からの伝達事項

(1) 令和5年度東京都予算に対する要望事項について

来年度の東京都予算に対する要望を行った。今回の重点

都民ファーストの会、都議会公明党のヒアリングにおいて説明した。

(2) 医師会および医療機関への安全確保に資する警察からの支援について

本会では、安全確保に資する必要な支援を受けるために警視庁と連携を図り、各地区医師会の所轄となる警察署の一覧を作成した。地区医師会および各医療機関において、所轄の警察署とさらなる連携を図り、安全確保に努めていただくようお願いする。

(3) オンライン資格確認の導入の原則義務化について

令和5年4月からのオンライン資格確認原則義務化に伴い、厚生労働省よりすべての

医療機関に顔認証付きカードリーダーの早期取得が依頼されている。日本医師会では相談窓口を設置しており、寄せられた情報は厚生労働省への対応や要望に大いに役立つため、会員への周知をお願いする。

(4) 故安倍晋三国葬儀について

故安倍晋三元首相の国葬儀が9月27日(火)午後2時から日本武道館において開催される予定である。当日の救急医療体制について留意いただきたい。

(5) 東京レガシーハーフマラソンについて

東京レガシーハーフマラソンが、10月16日(日)午前8

時から国立競技場をスタート・フィニッシュ会場として初開催される。当日の救急医療体制について留意いただきたい。

(6) 第5期「東京在宅医療塾」開講に伴う受講者募集のお知らせについて

本年度の「東京在宅医療塾」は、会員のほかに医学部学生(都内大学医師会)も受講対象とする。第1回を10月8日(土)、第2回を11月26日(土)、第3回を12月10日(土)にオンラインで開催する。申込締め切りを9月26日(月)に延長したので、多くの方に参加いただきたい。

(7) 新型コロナウイルス感染症について

新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症の全数届出の見直しは全国一律で実施されることとなった。また、感染者の療養期間の短縮等について情報提供した。

(8) 救護所のピクトグラム(案内用図記号)の推奨および外国人医療に関する自治体の取組事例について

東京都医師会外国人医療対策委員会は、外国人に対する医療提供体制の充実を努めるため検討を重ねており、特に災害時における体制整備に取り組んでいる。本委員会では外国人にも分かりやすい国際基準のピクトグラムの活用を推奨しているため、地域の防災訓練等で活用いただきたい。

(9) 医師会立看護師・准看護師学校養成所の学生募集に係るポスターについて

入学希望者の減少が課題となっていることから、本会では学生募集の広報活動として各学校共通となる学生募集ポスターを作成した。医療機関の待合室等に掲示していただき、多くの方に広報していただきたい。

(10) 令和4年度在宅難病患者訪問診療事業地区医師会別実施状況報告(第1四半期)について

「第31回日本医学会総会2023東京」の参加登録のお願いについて

日本医学会総会が2023年4月に東京都で開催される。参加登録について、引き続き周知をお願いしたい。

◎地区医師会からの報告

(1) 城東ブロック

医師国保からのお知らせ

組合員の資格確認について

～資格要件を満たしているか、再度確認をお願いいたします～

- 現在も医療・福祉の事業または業務に従事していますか？
- 保険証の住所は住民票と一致していますか？
- (医師国保に加入している従業員がいる場合) 退職した方や非常勤になった方の喪失手続きはしましたか？
- (法人事業所・常勤の従業員が5人以上の個人事業所の場合) 健康保険適用除外承認は受けていますか？

組合員や家族に資格の喪失や変更があった場合は、すみやかに届け出てください

各種届出に必要な書類は、ホームページよりダウンロードできます。

東京都医師国民健康保険組合 ☎ 03-3270-6433 (業務課)



月曜から金曜 あさ6時15分頃から

『モーニングライフアップ 今日の早起きドクター』

ニッポン放送 (AM1242kHz/FM93.0MHz) 朝の番組「飯田浩司のOK! Cozy up!」内で6時15分頃から5分程度、東京都医師会の役員等が出演して生活に役立つ健康情報をお届けしています。過去の放送はすべて番組ホームページまたはポッドキャストから聴くことができます。

飯田浩司の OK! Cozy up!



■番組ホームページ <http://www.1242.com/cozy/>

■ポッドキャスト <https://omny.fm/shows/cozy-up/playlists/doctor>

- ① 予防接種等の支払単価の調査について (荒川区医師会)
- ② 城南ブロック (日本橋医師会)
- ① 大田区三医師会コロナ後遺症専門外来について (大森医師会)
- ◎ 出席者による意見交換 (足立区医師会)
- ◎ その他 (3) 医療機関検索サイトに関する問題について (渋谷区医師会)
- (1) 役員賠償責任保険につ

令和4年度 関東甲信越医師会連合会

定例大会

令和4年度関東甲信越医師会連合会が、東京都医師会が当番で、9月11日(日)に都内のホテルで開催された。東京都医師会からは尾崎治夫会長以下22名が参加し、来賓には日本医師会から松本吉郎会

長、茂松茂人・角田徹・猪口雄二各副会長、長島公之・宮川政昭・細川秀一・黒瀬巖各常任理事、東京都から小池百合子知事が招かれた。定例大会では、令和3年度に関する報告があった。次に以下の8項目が大会

の決議として採択された。

決議

① 現下の水道光熱費、食料料費等の物価高騰による医療機関・介護事業所等の経営上の危機に対する支援が早急になされること
② 医療現場での働き方改革では、医師の身体的かつ精神的な健康確保のみならず、生活を守るための所得確保も考慮し、救急医療や産科医療などをはじめとした地域医療の崩壊を招かぬよう施行されること
③ 災害発生時や新興・再興感染症のパンデミック時に、的確な医療が円滑に提供できるよう、平時より危機対応総合研究組織(日本版CD

C)、保健所機能強化、臨時医療施設(サージキャパシティ)など施設設備の常設化や支える人材育成など、危機管理対応能力の強化構築をすること
④ 災害時やパンデミック時にも対応し、円滑に健康情報の共有が図れる一元的なデジタル情報システムを早急に確立すること
⑤ 新型コロナウイルス感染症に対する我が国のワクチンや治療薬の研究開発・製造体制を早期確立すること
⑥ かかりつけ医が24時間365日、地域の医療を支えるための視点に立ったオンライン診療の推進を図ること
⑦ 准看護師に介護教育を施したうえで、地域における医療と介護の円滑な連携を図るための人材となるよう、新



挨拶する尾崎会長

最後に、松本日本医師会会長による特別講演「令和4年度診療報酬改定を踏まえた動向について」が行われ、閉会した。

なお、来年度の本連合会には栃木県医師会が当番で、令和5年10月1日(日)に宇都宮市内での開催を予定している。

たな国家資格の創設等を検討すること
⑧ 社会資本である医療機関の事業承継については、一般中小企業並の税制優遇措置を講じること

1 外来感染対策向上加算の近況と感染防止対策評価について

「診療・検査医療機関における外来感染対策向上加算の届出割合」は概ね40〜50%に留まることが判明し、多くの医療機関が施設基準や算定要件が厳しすぎることを理由に届け出をしていないことが示唆され、改めて「要件緩和」の必要性を確認した。

更に、感染対策を行う全ての医療機関が本加算を算定できるようにするために、医師会が実施している取り組みについて情報交換を行い、

・地区医師会が連携機関となり、カンファレンス等を主催するためのサポート
・地区医師会が「加算」を算定する医療機関と診療所の連携を調節するため」の支援
・指針やマニュアルなどの参考資料の提供
・提出書類のひな形の作成・記入例の提示
など具体的な事例も紹介され、各都県とも懸命に努力している様子がうかがえた。

2 リフィル処方箋について

標記テーマに対しては、無診察投薬となり医師法第20条等に抵触するのではないか
・2回目以降の処方箋は薬剤師が判断するにも拘わらず責任の所在は医師にある
・通常の対面診療によって行えるはずの、「きめ細かい診察に基づく適切な指導や管理が行えないために」病状の悪化」が危惧される

医療保険部会

医療保険部会、介護保険・地域包括ケア部会、救急災害部会

9月11日(日)、令和4年度関東甲信越医師会連合会医療保険部会および介護保険・地域包括ケア部会、救急災害部会がオンラインで開催された。今年度は、当日の議論を深めるため、各部会とも事前にWEB会議を開催し、テーマを3題に集約して検討した。

東京都医師会からは角田徹副会長、蓮沼剛・黒瀬巖両理事が参加した。また日本医師会から長島常任理事が臨席し、各検討テーマに対してコメント並びに総括を行った。

・リフィル処方の導入は、医療費適正化を優先し、患者のためになる安全な医療の提供にはならないなどの疑問や懸念が多数報告された。

本検討では最終的に、今後十分な議論のもとで、改めて「制度の見直し」を求める
・医師の診療を定期的に受診することの大切さを国民に向けて丁寧に周知すべきとの認識で一致した。

3 今年度診療報酬改定実施後におけるオンライン診療の実態と課題

今年度の診療報酬改定で、オンライン診療が原則初診から解禁された。これを受けて、「かかりつけ医がオンライン診療を必要と判断した際には、支障なく行えるよう課題解決に取り組む」ために、各都県のオンライン診療状況について情報交換した。
・自宅療養コロナ患者への対応などからオンライン診療は増加傾向にあったが、診療報酬改定による届出や報告による煩雑化の影響もあり、本年4月には「情報通信機器を用いた診療に係る施設基準」の届出医療機関数は、むしろ減少している県も少なくない

医師側は医師資格証、患者側は運転免許証やマイナンバーカードなど顔認証付きの公的な証明書と保険証の組み合わせにより、本人確認は概ね問題ないが、「なりすまし」などの危険性は否定できない

・一部負担金の未払い問題は顕在化していないが、クレジット決済に伴う導入やランニングに係る費用の問題がある

日本医学会連合の「オンライン診療の初診に関する提言」と、厚生労働省が定める「オンライン診療の適切な実施に関する指針」を遵守することが基本
・初診からのオンライン診療はかかりつけ医に限るべき
・営利優先企業の参入問題は現時点ではほぼ認められないが、危惧は感じている

オンライン診療のルール作りには、医療現場に精通する医師の意見を最大限反映すべき
また、オンライン診療の実施状況や導入の動機のほか、課題や問題点等を設問とする「オンライン診療に関するアンケート調査」を共同で実施したところ、2720名と多くの会員から回答を得ることができた。この調査結果については、後日詳細に検討したうえで、改めて発表する予定である。

介護保険・地域包括ケア部会

東京都医師会からは平川博之副会長、西田伸一・土谷明男両理事が参加した。また日本医師会から釜淵敏常任理事が臨席し、各検討テーマに対してコメント並びに総括を行った。



定例大会では、松本日医会長による特別講演が行われた

1 地域共生社会における医師会の役割について

地域包括支援センターや地域生活支援拠点等の各種相談窓口と地区医師会との連携、高齢・障害・子育て・貧困等

各福祉部門の連携に医療も助力すること、等が提言された。

2 新型コロナウイルス感染症のクラスター発生時の高齢者施設等における医療支援のさらなる強化について

平時からの感染症対策部門の設置、迅速かつ継続的な感染対策指導と医療支援により必要に応じて施設での療養継続を可能とすること、クラスターが発生した施設への介護人材の派遣をより実効性のある仕組みにすること、等が提案された。

3 かかりつけ医と地域包括ケアシステムについて

活発な議論が行われ、国で議論されている「かかりつけ医制度」については反対意見が多かった。一方で、今後の社会構造を勘案すれば、総合性、継続性、随時制、アクセシビリティを担保した医療体制の普及が早急の課題であり、我が国の大きな課題である。「日医かかりつけ医機能研修」をさらに進化発展させる必要性が指摘された。

救急災害部会

東京都医師会からは猪口正孝副会長、新井悟・市川菊乃

両理事が参加した。また日本医師会から細川常任理事が臨席し、各検討テーマに対してコメント並びに総括を行った。

1 医師の働き方改革と救急医療について

医師の働き方改革、すなわち労働時間の制限をそのまま進めれば一次、二次、三次救急、小児周産期救急の維持は極めて困難であること、大学病院等では医師の自己研鑽の機会が奪われること等が各都県共通の課題であることが示された。具体的な解決策を医療機関や行政、労働基準局が連携して地域の救急医療が継続されるように実行することが重要であるとの意見が出された。この中で、特に医師会が主導的な役割を果たすことが必要であるとの意見も出された（須藤英仁群馬県医師会長、茂松日本医師会副会長）。

また、中長期的視点では医師の良質な健康・生活を実現し質の高い医療を提供するため、働き方改革を遂行することとは必要であるが、短期的視点では、救急医療機関の機能連携および役割分担により患者を転院搬送することで一部の医療機関、医師に負担が集中しないような方策で勤務時間管理を目指すべきではないかという意見が出された。

2 かかりつけ医と救急医療・災害医療・感染症医療（新興感染症、パンデミック）について

救急医療・災害医療におけるかかりつけ医の役割として

は、①地域の人々が、住み慣れた街で24時間365日安心して暮らせるために、救急・災害・パンデミック医療においても、入院以外の生活に密着した基礎的医療を提供できるよう機能しなければならないこと、②医師会から「かかりつけ医機能」を発信することが重要なこと、③医師個人ではなくかかりつけ医の集団として機能することが望まれること、との意見が出された。

神奈川県医師会からは、医師会に入会する条件として休日診療所への勤務、災害訓練の参加を必須としている市医師会の例も示された。

3 災害医療・避難所運営、避難行動要支援者、高齢者の施設対応、コロナ禍での災害医療対応も含め、避難所運営については、雑魚寝の避難生活が多くの地域で続いていることが問題であること、環境改善のためにはコロナの宿泊療養施設を参考としたホテルの活用が有用で

は、①地域の人々が、住み慣れた街で24時間365日安心して暮らせるために、救急・災害・パンデミック医療においても、入院以外の生活に密着した基礎的医療を提供できるよう機能しなければならないこと、②医師会から「かかりつけ医機能」を発信することが重要なこと、③医師個人ではなくかかりつけ医の集団として機能することが望まれること、との意見が出された。

神奈川県医師会からは、医師会に入会する条件として休日診療所への勤務、災害訓練の参加を必須としている市医師会の例も示された。

都医ニュース表紙の写真を募集

本ニュースは毎月、季節に合った東京の写真を表紙に掲載しております。その表紙写真に、先生が撮影した写真を応募してみませんか？ 都内の写真で、季節感のあるものをお願いします。本会広報委員会で掲載を決定いたします。なお、掲載された写真は、本会のホームページにも掲載させていただきます。

応募規定 デジタルカメラやスマートフォンで撮影をした600万画素以上(横3000×縦2000ピクセル以上)のデジタルデータ
プリントサイズは、横235mm×縦137.5mm以上

応募・問い合わせ先

〒101-8328 東京都千代田区神田駿河台2-5
東京都医師会 広報学術課 ☎03-3294-8821 (代)
kouhou@tokyo.med.or.jp



香取委員長



シンポジウムの様子

TMA近未来医療会議 第2回 公開シンポジウム

東京都医師会では、ウイズ／ポストコロナ時代における医療提供体制の抜本的な改革と社会保障の理想像について幅広く検討することを目的として「TMA近未来医療会議」を設置している。本会議では「2040年に向けた医療供給体制と診療報酬体系の抜本的改革」を基本テーマに、4つの論点（キーワード）に分けて議論している。

9月16日（金）、東京都医師会館で本会議の第2回公開シンポジウムがハイブリッド形式で開催された。第2クールでは「2040年に向けた地域医療提供体制」を主要議題とし、地域医療構想・地域包括ケアシステム・かかりつけ医機能を論点として、計3回のワーキンググループ（WG）会議に加えて検討委員会が行われ、提言を取りまとめた。

尾崎治夫会長の開会挨拶に続き、来賓の川松真一朗東京都議会自由民主党幹事長代行、たぐち学都民ファーストの会東京都議団幹事長、および高倉良生都議会公明党議員団副団長から開会に際して挨拶があった。更に司会の黒瀬巖理事から、来賓の岡本利久厚生労働省医政局総務課長および岩井志奈東京都福祉保健局事業推進担当部長の紹介が行われた。

シンポジウムの初めには、香取照幸委員長兼第2クールWG座長から、「第2クルールの論点に関する提言」として次の項目が詳細に紹介された。

- ①医療提供体制改革について
②在宅医療・地域医療の強化
③超高齢社会における医療のあり方の変化
④必要な医療サービスの保障、切れ目のない医療サービス提供機能相互の役割分担と連携、地域包括ケアネットワークとそれを担うマネジメント機能
⑤資源の効率利用、働き方改革
⑥医療費適正化（最適化）、無駄な医療の排除

- ①我が国の医療提供体制についての現状認識
②医療提供体制改革の視点
③在宅医療・地域医療の強化
④超高齢社会における医療のあり方の変化
⑤必要な医療サービスの保障、切れ目のない医療サービス提供機能相互の役割分担と連携、地域包括ケアネットワークとそれを担うマネジメント機能
⑥資源の効率利用、働き方改革
⑦医療費適正化（最適化）、無駄な医療の排除

かかりつけ医・かかりつけ医機能についての医療界の統一見解 「日本医師会・四病院団体協議会合同提言」（2013年8月8日）

「かかりつけ医」とは（定義）
なんでも相談できる上、最新の医療情報を熟知して、必要な時には専門医、専門医療機関を紹介でき、身近で頼りになる地域医療、保健、福祉を担う総合的な能力を有する医師。

「かかりつけ医機能」
かかりつけ医は、日常行う診療においては、患者の生活背景を把握し、適切な診療及び保健指導を行い、自己の専門性を超えて診療や指導を行えない場合には、地域の医師、医療機関等と協力して解決策を提供する。

かかりつけ医は、自己の診療時間外も患者にとって最善の医療が継続されるよう、地域の医師、医療機関等と必要な情報を共有し、お互いに協力して休日や夜間も患者に対応できる体制を構築する。

かかりつけ医は、日常行う診療のほかに、地域住民との信頼関係を構築し、健康相談、健診・がん検診、母子保健、学校保健、産業保健、地域保健等の地域における医療を取り巻く社会的活動、行政活動に積極的に参加するとともに保健・介護・福祉関係者との連携を行う。また、地域の高齢者が少しでも長く地域で生活できるように在宅医療を推進する。

患者や家族に対して、医療に関する適切かつわかりやすい情報の提供を行う。

ジストと講演内容は次の通りである。

「都内全域をカバーする医療連携システム 東京総合医療ネットワーク」

目々澤肇 理事

「東京都の地域医療構想 構想区域（二次保健医療圏）ごとの病床配分は適正か？」

土谷明男 委員

「在宅医療とこれからの課題」

荘司輝昭 委員

「マーケティング視点とかかりつけ医」

真野俊樹 委員

時間の都合上、フロアからの質疑応答は制限されたが、最後まで多くの医師会関係者とマスコミが聴講した。なお、本シンポジウムの模様は、

東京都医師会ホームページに動画を掲載する予定なので、興味のある方はぜひ視聴いただきたい。

本会議はすでに第3クルールの議題「コロナ対策 平時と有事」に関する検討をWGで開始しており、年末に向けて提言を取りまとめる予定である。

（梓）かかりつけ医・かかりつけ医機能については、日本医師会・四病院団体協議会が2013年に公表した合同提言の中で定義を示しており、これが現在も医療界の統一見解となっている。

いよいよワクチン あなたの番です

開会でクーポン券が配られます

予約をします

接種会場ではクーポン券を提示し、接種券を交付します

接種

※接種会場には接種券に添付されたQRコードを提示する必要があります

肩を出しやすい服装でお越しください

15～30分待機します

終了

都民のため、人のため。 東京都医師会

広告「いよいよワクチン、あなたの番です」



尾崎会長

東京都医師会の広告が 中日新聞社広告大賞を受賞

令和3年4月23日、東京新聞（都内版）に掲載された東京都医師会の広告「いよいよワクチン、あなたの番です」が、第13回中日新聞社広告大賞（読者が選ぶ東京新聞広告賞 部門賞）を受賞した。

本広告は、新型コロナウイルスのワクチン接種が日本で開始される際、都民に接種までの過程をわかりやすく周知するために制作された。

表彰式は9月9日（金）に都内で行われ、尾崎治夫会長が出席した。

東京都医師会では、ウイズ／ポストコロナ時代における医療提供体制の抜本的な改革と社会保障の理想像について幅広く検討することを目的として「TMA近未来医療会議」を設置している。本会議では「2040年に向けた医療供給体制と診療報酬体系の抜本的改革」を基本テーマに、4つの論点（キーワード）に分けて議論している。

9月16日（金）、東京都医師会館で本会議の第2回公開シンポジウムがハイブリッド形式で開催された。第2クールでは「2040年に向けた地域医療提供体制」を主要議題とし、地域医療構想・地域包括ケアシステム・かかりつけ医機能を論点として、計3回のワーキンググループ（WG）会議に加えて検討委員会が行われ、提言を取りまとめた。

尾崎治夫会長の開会挨拶に続き、来賓の川松真一朗東京都議会自由民主党幹事長代行、たぐち学都民ファーストの会東京都議団幹事長、および高倉良生都議会公明党議員団副団長から開会に際して挨拶があった。更に司会の黒瀬巖理事から、来賓の岡本利久厚生労働省医政局総務課長および岩井志奈東京都福祉保健局事業推進担当部長の紹介が行われた。

シンポジウムの初めには、香取照幸委員長兼第2クールWG座長から、「第2クルールの論点に関する提言」として次の項目が詳細に紹介された。

①医療提供体制改革について
②在宅医療・地域医療の強化
③超高齢社会における医療のあり方の変化
④必要な医療サービスの保障、切れ目のない医療サービス提供機能相互の役割分担と連携、地域包括ケアネットワークとそれを担うマネジメント機能
⑤資源の効率利用、働き方改革
⑥医療費適正化（最適化）、無駄な医療の排除

（梓）かかりつけ医・かかりつけ医機能については、日本医師会・四病院団体協議会が2013年に公表した合同提言の中で定義を示しており、これが現在も医療界の統一見解となっている。

東京都医師会 定例記者会見

東京都医師会では、ウイズ／ポストコロナ時代における医療提供体制の抜本的な改革と社会保障の理想像について幅広く検討することを目的として「TMA近未来医療会議」を設置している。本会議では「2040年に向けた医療供給体制と診療報酬体系の抜本的改革」を基本テーマに、4つの論点（キーワード）に分けて議論している。

9月16日（金）、東京都医師会館で本会議の第2回公開シンポジウムがハイブリッド形式で開催された。第2クールでは「2040年に向けた地域医療提供体制」を主要議題とし、地域医療構想・地域包括ケアシステム・かかりつけ医機能を論点として、計3回のワーキンググループ（WG）会議に加えて検討委員会が行われ、提言を取りまとめた。

尾崎治夫会長の開会挨拶に続き、来賓の川松真一朗東京都議会自由民主党幹事長代行、たぐち学都民ファーストの会東京都議団幹事長、および高倉良生都議会公明党議員団副団長から開会に際して挨拶があった。更に司会の黒瀬巖理事から、来賓の岡本利久厚生労働省医政局総務課長および岩井志奈東京都福祉保健局事業推進担当部長の紹介が行われた。

シンポジウムの初めには、香取照幸委員長兼第2クールWG座長から、「第2クルールの論点に関する提言」として次の項目が詳細に紹介された。

①医療提供体制改革について
②在宅医療・地域医療の強化
③超高齢社会における医療のあり方の変化
④必要な医療サービスの保障、切れ目のない医療サービス提供機能相互の役割分担と連携、地域包括ケアネットワークとそれを担うマネジメント機能
⑤資源の効率利用、働き方改革
⑥医療費適正化（最適化）、無駄な医療の排除

（梓）かかりつけ医・かかりつけ医機能については、日本医師会・四病院団体協議会が2013年に公表した合同提言の中で定義を示しており、これが現在も医療界の統一見解となっている。

東京都医師会では、ウイズ／ポストコロナ時代における医療提供体制の抜本的な改革と社会保障の理想像について幅広く検討することを目的として「TMA近未来医療会議」を設置している。本会議では「2040年に向けた医療供給体制と診療報酬体系の抜本的改革」を基本テーマに、4つの論点（キーワード）に分けて議論している。

9月16日（金）、東京都医師会館で本会議の第2回公開シンポジウムがハイブリッド形式で開催された。第2クールでは「2040年に向けた地域医療提供体制」を主要議題とし、地域医療構想・地域包括ケアシステム・かかりつけ医機能を論点として、計3回のワーキンググループ（WG）会議に加えて検討委員会が行われ、提言を取りまとめた。

尾崎治夫会長の開会挨拶に続き、来賓の川松真一朗東京都議会自由民主党幹事長代行、たぐち学都民ファーストの会東京都議団幹事長、および高倉良生都議会公明党議員団副団長から開会に際して挨拶があった。更に司会の黒瀬巖理事から、来賓の岡本利久厚生労働省医政局総務課長および岩井志奈東京都福祉保健局事業推進担当部長の紹介が行われた。

シンポジウムの初めには、香取照幸委員長兼第2クールWG座長から、「第2クルールの論点に関する提言」として次の項目が詳細に紹介された。

①医療提供体制改革について
②在宅医療・地域医療の強化
③超高齢社会における医療のあり方の変化
④必要な医療サービスの保障、切れ目のない医療サービス提供機能相互の役割分担と連携、地域包括ケアネットワークとそれを担うマネジメント機能
⑤資源の効率利用、働き方改革
⑥医療費適正化（最適化）、無駄な医療の排除

（梓）かかりつけ医・かかりつけ医機能については、日本医師会・四病院団体協議会が2013年に公表した合同提言の中で定義を示しており、これが現在も医療界の統一見解となっている。

地区医師会新会長紹介

- ①生年月日 ②最終卒業校 ③略歴
④趣味 ⑤好きな言葉

千代田区
医師会長
矢島 俊巳 69 (内科・循環器内科・
外科・小児科)

①昭和28年5月8日
②日本医科大学大学院医学研究科
③千代田区医師会理事、同副会長
④旅行、ゴルフ
⑤至誠通天

中央区
医師会長
杉野 敬一 74 (内科・
循環器科)

①昭和23年9月7日
②日本大学医学部
③中央区医師会副会長、
都医代議員
④スポーツ観戦、食べ歩き
⑤協調

港区
医師会長
坪田 淳 58 (内科・循環器内科・
呼吸器内科)

①昭和39年9月16日
②杏林大学医学部
③港区医師会監事、同理事、同副
会長、都医代議員、同広報委員
会委員、同医療保険委員会委員、
同産業保健委員会委員、港区大気汚染障害認定審査会会
長、東京都社会保険診療報酬請求書審査委員会委員、関
東信越厚生局保険指導医、区中央部糖尿病医療検討会委
員、港区介護認定審査会合議体長
④音楽、スポーツ、車
⑤実るほど頭を垂れる稲穂かな

足立区
医師会長
阿部 聡 65 (脳神経外科・
内科・心療内科)

①昭和32年4月10日
②東京慈恵会医科大学医学部
③足立区医師会理事、
法政大学特任教授
④ヨット、航空機操縦
⑤感謝

田園調布
医師会長
内山 浩志 66 (小児科)

①昭和31年10月9日
②東京慈恵会医科大学医学部
③田園調布医師会公衆衛生委員、
同副会長
④読書、スキューバダイビング
⑤昭和十一隅忘己利他

蒲田
医師会長
松坂 聡 64 (内科・胃腸科・
小児科・皮膚科・
消化器科)

①昭和32年12月27日
②日本医科大学医学部
③蒲田医師会理事、同副会長、
都医代議員、日医予備代議員
④ゴルフ、読書
⑤和して同ぜず

練馬区
医師会長
内田 寛 62 (小児科・内科)

①昭和35年6月6日
②東京医科大学医学部
③練馬区医師会理事、同副会長、
同保育園代表、
都医予備代議員
④ドライブ、テニス

西多摩
医師会長
進藤 幸雄 56 (内科・消化器内科・
リハビリ
テーション科)

①昭和40年12月11日
②東海大学医学部
③西多摩医師会理事、同副会長
④テニス、山登り
⑤意志あるところに道は開ける

八王子市
医師会長
鳥羽 正浩 51 (内科・小児科・
放射線科)

①昭和46年2月17日
②日本医科大学医学部
③八王子市医師会理事、同副会長、
都医代議員
④読書、旅行、グルメ
⑤季下に冠を正さず

多摩市
医師会長
佐々部 一 60 (消化器科・外科・
整形外科)

①昭和37年5月9日
②聖マリアンナ医科大学医学部
③多摩市医師会理事、同副会長
④スキー、マウンテンバイク、
筋トレ
⑤為せば成る、為さねば成らぬ、
何事も

東京大学
医師会長
田中 栄 60 (整形外科)

①昭和37年5月19日
②東京大学医学部
③日医学術企画委員会副委員長、
日本整形外科学会代議員、日本
リウマチ学会副理事長、日本臨
床リウマチ学会理事長、日本骨粗
鬆症学会理事、日本骨免疫学会理事、日本関節病学会理
事、日本筋学会理事、日本サルコペニア・フレイル学会
理事、日本肩関節学会理事
④カラオケ ⑤一期一会

東京消防庁救急相談センター

COVID-19サージ期対応 これからに向けて

新型コロナウイルス感染症の第6波において、7月26日からサージ期対応が運用されました。運用期間中、執務された皆様のご理解・ご協力に感謝申し上げます。相談ノートには今後の体制整備に向けた貴重なご意見を頂戴しております。

特に、次への備えとして、現行システムを効果的かつ効率的に運用するための判断となる基準や目安となり得る定量的・定性的指標を、これまで集積されたデータの検証を通して見出すことは重要課題と考えます。

人的、物的資源を投入した複数の叡智のネットワークが不明確では、その存在価値をも認知されていないと同じことかもしれません。COVID-19蔓延期の最中、罹患者が頼りにするべき各種機関の役割をより分かりやすく都民に示すことができるよう、関係機関との協力体制の構築に関わってまいります。

＃7119も有事の際、利用者が求める機能を十分に発揮できる組織を目指してまいりますので、引き続き、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

東京消防庁救急相談センター受付状況 (速報値)

[令和4年1月1日から令和4年6月30日まで]

	累 計	前年件数	前年同時期増減 (増減比)	受付件数に 占める割合	前年 同時期	一日 あたりの 件数
総 着 信 件 数	219,965	175,584	44,381 (25.3%)			1,215.3
受 付 件 数	202,447	170,029	32,418 (19.1%)	—	—	1,118.5
救 急 相 談	123,049	112,480	10,569 (9.4%)	60.8%	66.2%	679.8
救 急 要 請	20,085	18,130	1,955 (10.8%)	(※1) 16.3%	(※1) 16.1%	111.0
医療機関案内	78,630	57,058	21,572 (37.8%)	38.8%	33.6%	434.4
相談前救急要請	354	330	24 (7.3%)	0.2%	0.2%	2.0
かけ直し依頼	414	158	256 (162.0%)	0.2%	0.1%	2.3
その他 (苦情)	0	3	-3 (0.0%)	0.0%	0.0%	0.0
応答率(※2)	92.0%	96.8%	-4.8%			

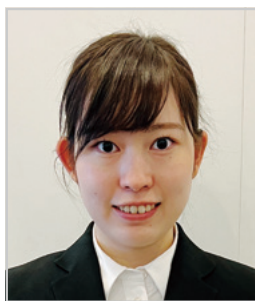
(※1) 救急相談件数に占める割合

(※2) 応答率とは、総着信件数に占める受付件数の割合 (応答率=受付件数÷総着信件数(%))

看護師への医師助言	14,802	9,178	5,624 (61.3%)			81.8
通信員への医師助言	5,926	3,443	2,483 (72.1%)			32.7

175
みどりの
広場地域医療と
地域活性化のための
まちづくり構想東京都医師会「医学生懸賞論文 Student Doctor
プラタナス大賞」受賞者

東京医科大学医学部医学科6年 古森 彩



つながる。診療所には都市部から交代で医師を常駐させることで、プライマリ・ケアだけでは足りない専門的な視点からの診療も受けることができる。

住民の健康情報は全てクラウドで管理し、医療機関だけでなく介護施設や消防、保健所、行政全てが更新・閲覧できるよつにする。適切な医療・サービスの提供が可能となり、医療費の削減や病気の発症を事前に予防・探知し重症化を防ぐことが可能となる。

新型コロナウイルスの感染拡大により、医学生である私たちにも実習の中止などさまざまな影響が及んだ。その中でも、社会医学・地域医療の実習は本来地域の診療所や介護施設で行う予定であったが、私の大学ではオンラインでのグループワークに変更を余儀なくされた。課題の一つとして、地域医療の現状を改善する案を考えるという課題が出された。この課題を深掘りしてみたいと思い、実際の地域活性化の成功例を参照しながら、地域医療とまちの活性化を同時に叶える私なりのまちづくり構想を考え、東京都医師会主催「医学生懸賞論文 Student Doctor プラタナス大賞」に応募してみた。

まず、商店街の中に医療機関を含む複合施設を作る。そこ、診療所や薬局、健診室、ジム、スタジオ・プールを完備する。来館して運動するとポイントが貯まり、商店街で使える商品券に交換することができる。この仕組みで住民の健康を増進し、商店街の収益アップを図る。またデータの一環として、サービス利用者者に商店街で買い物をしてもらうことで、買い物に難しかった高齢者への生活支援・リハビリと商店街の利益にも

つながる。診療所には都市部から交代で医師を常駐させることで、プライマリ・ケアだけでは足りない専門的な視点からの診療も受けることができる。

の流出は防ぐことができる。将来の展望として、自宅に配置できる看護ロボットの開発が有用と考える。日々のデータ（バイタルや服薬管理、食事内容）を収集しクラウド上にリアルタイムでアップし、異常があるときに各機関に知らせがいく仕組みだ。一人で暮らす高齢者の話し相手となることで、精神衛生の向上を図ると同時に認知症予防と早期発見にもつながると考える。

うに何かの衝撃で簡単に破綻してしまうと思う。現状を受け入れるだけでなく、新しい試みも柔軟に取り入れていく姿勢が今の医療全体を変えるきっかけになるのではないかな。

＊東京都医師会では、医学生が考える「医師像、医療のあり方」を創出し、将来医師となる医学生を支援するとともに、医学生と医師会が意識を共有し、新たな医師会活動につなげることを目的として、令和3年度より本懸賞論文を創設しました。受賞論文の全文は、東京都医師会雑誌4・5月合併号（通巻724号）に掲載されています。



2019年4月、都市農業公園にて撮影。足立区医師会8地区主催の会。

江北五色桜を訪ねて
区民の尽力でよみがえった
江戸の景色

趣味の散歩

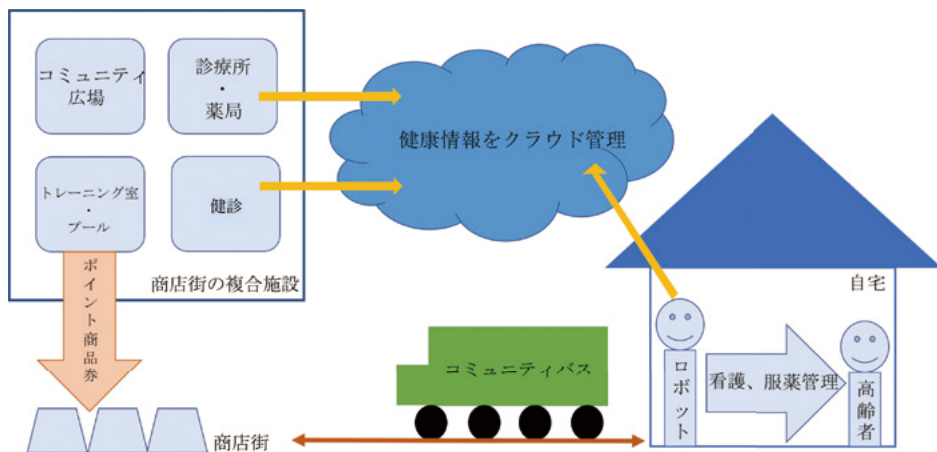
かつて足立区には「荒川堤の五色桜」という桜の名所がありました。1本の木に5色の花が咲くのはありませぬ。荒川土手に78種類、里桜が3000本以上植えられ、その美しい風景を「五色の雲がたなびく如く」と評されたのが由来です。この桜は足立区に自生していたわけではなく、江戸時代に大名が江戸の屋敷に植えていた里桜が元になっています。

品種改良された桜にはそれぞれ物語があり、美しいだけでなく趣深いです。明治維新で状況が変わり、伐採されてしまう桜を惜しんだ一人の庭師が、足立区江北村の村長と意気投合し、村人が寄付金を出し合って江北村で桜を育てました。苦労の末に、当時の皇太子殿下（後の昭和天皇）がの昭和天皇）が見物にいらしたほどの桜の名所になりました。ところが戦争で桜を育てる余裕がなくなり、木を切って燃料にする者も現れるなど、残念な状況になりました。その後、区制50年を機に桜の復興が始まり、区と区民の尽力で都市農業公園に50種類の桜が、また区内の多くの場所にも桜が植樹されました。

父・木村繁（木村耳鼻咽喉科医院）が「江北村の歴史を語る会」で活動しているため、私も父が手作りした冊子を片手に桜を訪ね歩いていきます。倉入公園にはレーガンの里帰り桜や、遺伝で有名なメンデルのブドウの木もあり散策ポイントになっています。足立区医師会で桜の会を開催していたとき、先生方と語らいながら歩いたのは楽しい思い出になりました。コロナに負けず、毎年桜を見に行きたいものです。

（足立区医師会・木村康子）

まちづくり構想イメージ図



知ってますか？

ジェンダー・ギャップ指数
(Gender Gap Index : GGI)

2022年7月、世界経済フォーラム (World Economic Forum : WEF) が「The Global Gender Gap Report 2022」を公表し、各国の男女格差を測るジェンダー・ギャップ指数 (Gender Gap Index : GGI) を公開した。この指数は、「経済」「教育」「健康」「政治」の4つの分野のデータから作成され、1が完全平等、0が完全不平等を示している。今年の日本の総合スコアは0.650で前年より0.006数値を下げ、順位は146カ国中116位にとどまっている。

新型コロナウイルス感染症に関する医療において、胸を張って「全く問題ない」と言い切る医療関係者は恐らく一人もおらず。本書は、コロナ禍で日本人の底力を見せた「墨田区モデル」の偉業についてのルポルタージュである。筆者の江川紹子氏は、オウム事件でもわかるとおり有事問題に強いジャーナリストである。

発行▼時事通信社 価格▼1650円(税込)

掲 示 板

「想定外」をやっつけろ！
検証・なぜ墨田区は
コロナ禍第5波で重症者を出さなかったのか

江川紹子 著





中野区医師会

方山栄哲

マスクの効用

新型コロナウイルス感染症が流行してから、マスクをすることがごく当たり前になった。私は、マスクは暑苦しいし、声が出しづらいので元々好きな方ではなかったが、仕方なくしていると、思わぬ効用があることに気づいた。

まず、昼に餃子が食べられる。相手に不快な口臭を与えないからだ。また、青海苔たっぷりの焼きそばも食べられる。しっかり歯みがきしていても、青海苔というやつは1個や2個は歯についているものなので、ニッコリ笑顔の間抜け面を見せる心配がない。たまにひょっこり口の奥から出てきたものを、こっそり賞味することもできる(キタナイ?)。同様の理由で、無精ヒゲや鼻毛の処理もしばらくサボっても大丈夫。

それと、マスクをすると妙な安心感がある。相手に素顔をさらす必要がないからだろう。反対に、マスクをしている相手の表情は読

みにくいのだが、仮に相手が不愉快な時には、その怒りを直視しなくてよいことにも変な安心感がある。要するにマスクは仮面のようなものだ。

仮面といえば我が国では能面が代表的だが、能面というのは諸外国の仮面と異なり、かなり現実の人間に近いものだ。あんなにリアルにしては、素顔をさらすのと大した違いはないように思うが、マスクで半分だけ顔を隠すのと同じで、「見えそうで見えない、見えなさそうに見える」みたいな日本文化を象徴していると思われる。だから日本人はマスクが好きなのだろう。

さて、隠すことが賞賛される能の話とは異なり、誰もが知るべき報道の世界では、秘匿は許されない。我々が中野区医師会新聞も、正しい情報を「マスクする」ことなくお伝えしてゆこうと思う。

(中野区医師会新聞 2021年10月 No.652より抜粋)

練馬区医師会

榎本孝恵

雑感

先日、就学時健診に行きました。学校は静かです。新型コロナウイルス感染症の流行前は元気に「お願いします!」と挨拶がありましたが、マスクをして静かに私の前に立ち、診察が終わると黙って通り過ぎていきます。例年より短時間で終わりましたが、何か虚しく感じました。そうです、私は毎年この健診で元気な子どもたちと触れ合うことで、パワーをもらっていたのです。今年も無意識にパワーをもらうことを期待して学校に行ったので、静かに終わった健診に虚しさを感じてしまったのだと思います。

自分のクリニックを眺めてみると、新型コロナウイルス感染症流行前は本棚には大人用の雑誌以外に子ども用の絵本やマンガも並べてありましたが、今は本棚自体を片付けてしまいました。待っている間に子どもたちが飽きないように、キッズコーナーを作りおもちゃを置いていましたが、おもちゃは片付け、キッズコーナーをつぶして待合室を拡大しました。みんな感染対策です。もちろん、診察はコロナ前と同様に行っています。でも、以前も受診したことのある子どもたちは、診察以外にきっと頭の中にマンガやおもちゃへの期待があり何か物足りない、先日の学校健診で私が感じたのと同じような虚しい感覚を覚えているのではないのでしょうか。

学会もオンラインでこれまで通り参加できますが、会場で他の先生方にお目にかかり、ご助言をいただける機会はなくなってしまいました。

夫の職場や息子の大学では、食堂は営業しているものの、黙食で会話は禁止だそうです。空腹を満たすだけでなく、おしゃべりをするところこそ、職場や大学の食堂という場を構成する大切な要因であったように思います。

健診での児童の挨拶、クリニックのおもちゃ、学会での立ち話、食堂のおしゃべりにはこんなに価値がありま

すとは説明できませんが、日常生活における心の安らぎであったように思います。コロナ禍において「感染拡大防止」と「経済活動の促進」という重要な課題のもとに、数字やロジックでは見えないものの価値が失われたように思います。個人としても社会としても、なんとかバランスを保ちながら生きていくためには、こういう些細な心の安らぎの数々は大切なことだったと思います。

そんなことはデータにも載らない些細な、取るに足らない問題だ、もっと重大な問題があるだろうと言われれば、おっしゃるとおりです。しかし、人はパンのみにて生きるものにあらず、というキリストの垂訓が頭に浮かびます。

(練馬区医師会だより 令和4年1月 第646号より抜粋)



上野動物園 パンダの親子

渋谷区医師会 松村聡子

無 声 拝 聴

気象と本能

異常気象といわれて久しい。最近では異常が通常になっている。気象条件などの変化でジャイアントパンダやホッキョクグマなど、多くの生物の生息地域が減っていることが危惧されている。動物の種によっては、気候の状態に合わせて移動する本能もあるようだ。大規模な気候変動だけでなく、小さな天候の変化に対して、それぞれの動物が反応や順応をしている。鳶が輪を描いて上昇すると天気が崩れる、雨蛙が鳴くと雨、蟻が行列を作ると雨、猫が顔を洗うと雨、などの言い伝え

も多くある。細かい気圧の変化を機敏に感じ取れるのだろう。人間も、詳細な天気予報を計算できるようになる前から、頭痛の強さで低気圧が近づいていると感じたり、関節の痛みで雨が降りそうだと予測する能力を保持している。その能力が過敏であると、「天気痛」や「気象病」などと呼ばれる症状となる。特にこの数年は気象条件の変化につれて、天気痛や気象病で困らている方が増え、人口の1割程度はいるとのことだ。気圧の変動を内耳で感じ、交感神経の緊

張から血管収縮が起こることとで頭痛が生じるらしい。人間は他の動物に比べてその感覚は衰えているらしいが、環境変化が強くなり受ける影響が強くなってきたのだろう。自律神経のバランスを改善するために、食事や体操、ヨガ、日光浴など自ら工夫している方もいる。それでも症状で苦しむ方は、漢方薬などの治療薬を用いることもある。気象・気候の変化でさまざまな災害も増えている。世界の叡智で地球の保全を考えたい。

(石井一平)

ヒトメタニューモウイルス感染症

ヒトメタニューモウイルス(hMPV)は、2001年に発見されたウイルスで、RSウイルス(RSV)と同じニューモウイルス亜科に属し、その症状や経過も類似する。

hMPV感染症の流行のピークは、RSVの流行期(9月～翌年1月)から1～2カ月ほど遅れた3～6月頃である。RSV感染症は2020年には流行せず、2021年5月中旬から7月末まで全国的に大流行した。hMPV感染症は2022年7月から報告数が増えだした。おそらく2019年12月以来のCOVID-19の流行がこれらの感染症の流行期にも影響したのであろう。

hMPV感染症は小児のウイルス性呼吸器感染症の5～10%を占める。主にくしゃみ・咳による飛沫感染で広がり、3～5日間の潜伏期間の後、多くは発熱・咳・鼻水などのかぜ症状で軽快するが、一部の乳幼児はRSV感染症同様に息苦しさを伴う細気管支炎や肺炎を起こす。症状のみで両者を区別することは困難だが、RSV感染症が1歳以下(特に生後6カ月以下)での発症が多く、遅くとも2歳までにほぼ100%が初感染するのに対し、hMPV感染症は1～2歳からやや年長児に多く、2歳までに約半数が、遅くとも10歳までにほぼ全員が初感染する点で異なる。どちらも一度の感染では十分な免疫は獲得されず、生涯にわたり何度も感染を繰り返すうちに強い免疫を獲得する。定まった出席停止期間はなく、登園は解熱し鼻汁や咳と全身状態の改善を目安に判断する。

迅速検査は2014年1月から保険適用になった。当初は「画像診断(X線など)により肺炎が強く疑われる6歳未満」が対象だったが、2018年4月から画像診断の縛りがなくなった。ただし特異的治療がない上、個々のケースで症状が異なるので“上手に使いこなす”ことが大切である。(文責：萩原温久)

感 染 症 豆 知 識

東京都医師会
感染症予防検討委員会都医からのお知らせ
INFORMATION日臨内「かかりつけ医のためのWEB講座」
～スペシャリストがジェネラリストになるために～

問合先

日本臨床内科医会 E-mail: jpa@event-mhlab.jp

日時▶ 10月27日(木) 19時30分～21時45分

形式▶ WEB講演

セミナー▶ 「高血圧治療補助アプリによる生活習慣修正のアプローチ」勝谷友宏(勝谷医院 院長)

①「女性の鉄欠乏性—どう見つけるか、どうフォローするか—」大西真由美(日本臨床内科医会 学術部血液班) ②「(サル痘を含めた)ポックスウイルス感染症」本田壮一(日本臨床内科医会 学術部感染症班) ③「身体疾患と不安」太田大介(日本臨床内科医会 学術部心療内科班)

取得単位▶ 日医生涯教育制度2単位(CC: 82、43、8、69)

申込方法▶ 右記QRコードまたは当会ホームページをご覧ください。

参加費▶ 無料

第62回 国際治療談話会
総会「がんと糖尿病のゲノム医学の進歩」

(公財)日本国際医学協会 事務局

東京都世田谷区上馬 1-15-3 MK三軒茶屋ビル3F

TEL: 03-5486-0601 FAX: 03-5486-0599

E-mail: imsj@imsj.or.jp URL: <https://www.imsj.or.jp/>

日時▶ 11月17日(木) 18時30分～20時30分 形式▶ WEB講演

開会挨拶▶ 伊藤公一(日本国際医学協会 常務理事)

講演▶ 感想【座長】ゲオルグ・K・ロエル(日本国際医学協会 評議員)

「G7の展望: グローバルヘルスにおける日独のパートナーシップ」ティモテウス・フェルダー＝ルセッティ(ドイツ連邦共和国大使館 東京 厚生労働参事官)／【医学講演】【座長】伊藤公一(日本国際医学協会 常務理事)、近藤太郎(日本国際医学協会 常務理事)／【講演Ⅰ】「がんゲノム医療の将来展望」中釜 斉(国立研究開発法人 国立がん研究センター 理事長・総長)／【講演Ⅱ】「糖尿病のゲノム医学の進歩」門脇 孝(国家公務員共済組合連合会 虎の門病院 院長)

閉会挨拶▶ 石橋健一(日本国際医学協会 理事長)

取得単位▶ 日医生涯教育制度1単位(CC: 73、76)

申込方法▶ 右記QRコードまたは当協会ホームページをご覧ください。

視聴▶ 無料



日本医師会生涯教育講座

新型コロナウイルス感染防止のため、
事前申込制とさせていただきます。

日時 令和4年11月17日(木) 午後2時～5時

【申込方法】研修申込システムにて申込

オンライン(Webex)のみで開催します。

【定 員】100名

【申込締切】令和4年11月16日(水)

日本医師会生涯教育制度 合計2単位

カリキュラムコード 30

日本内科学会認定総合内科専門医更新単位 2単位

【問い合わせ先】

東京都医師会 広報学術課

TEL: 03-3294-8821 (代表)

※詳細は都医ホームページを
ご確認ください



慢性頭痛の最新治療

座長 東京都医師会理事

落 合 和 彦

東京歯科大学市川総合病院
神経内科 教授

柴 田 護 先生

富士通クリニック 内科
頭痛外来担当医師

五十嵐 久佳 先生

共催 東京都医師会
第一三共株式会社

頭痛発生のメカニズムと

頭痛の鑑別診断

柴田 護 先生

くも膜下出血を始めとする二次性頭痛の多くは、頭頸部に発生した侵害性刺激を三叉神経や上位頸髄神経が受容することで生じる侵害受容性疼痛である。そのような働きをする神経は硬膜、血管周囲、筋膜に分布し侵害受容器と呼ばれている。三叉神経痛は典型的な神経障害性疼痛である。一方、片頭痛は三叉神経系の異常活性化と中枢神経系の異常が織りなす特異な病態を有し、頭痛だけでなく予兆

や前兆と呼ばれる神経症候も呈する。

頭痛は日常臨床で遭遇することの多い症状であり、その鑑別は非常に重要である。脳血管障害や細菌性髄膜炎などの致死的になり得る疾患を見逃さず、当該科への紹介を迅速に行う。一次性頭痛では特に片頭痛と群発頭痛の診断基準を理解し、それぞれの特異的治療につなげることが大切である。

一次性頭痛の治療

update

五十嵐久佳 先生

2021年、我が国でも片頭痛の病態に深く関与するCGRPをターゲットとしたCGRP関連抗体薬が上市され、片頭痛医療は大きな変革期を迎えた。CGRP関連抗体薬は数々の臨床試験で従来の予防薬への反応が乏しい患者、慢性片頭痛、薬剤の使用過多に陥っている片頭痛患者にも有効性があることが報告されており、実臨床の場でも多くの患者からの喜びの声が聞かれている。一方、発売1年を過ぎ、使用中止時期、中

止後の経過などについて質問が寄せられている。また劇的な効果を示す患者がいる一方で無効例もあり、これに対する検討も必要となっている。

2022年6月には片頭痛急性期治療薬として5-HT_{1F}受容体作動薬であるラスミジタンが発売された。

本講座では、CGRP関連抗体薬とラスミジタンの投与に適する患者・その使用方法・注意点などについて解説する。

地区医師会長からの一言

杉並区医師会のこの1年の取り組み

杉並区医師会長 稲葉貴子



令和3年6月末に杉並区医師会長に就任して1年が経過しました。コロナ有りきの生活を受け入れなければ日々の業務は成り立たず、「ウィズコロナ」は所属施設が診療・検査医療機関に登録しようがしまいが、医療従事者にとってはもはや日常、当たり前のこととなっています。杉並区医師会でも医師会事業や、地域医療への取り組みについて試行錯誤を繰り返しながら活動を続けています。

杉並区医師会は昭和7年に発会し、昭和22年に『社団法人杉並区医師会』が設立されました。令和4年8月末現在、会員数は673名、401の診療所、19の病院が所属し、診療、介護・福祉事業への協力・助言、学校医、産業医、地域住民への健康啓発活動、予防医療（健康診断、予防接種事業）など、関係機関と協力しながら活動していますが、新型コロナウイルス感染症発生以来、従来の運用を維持することが大変難しくなりました。

甲田潔前会長のもと、医師会役員・委員と地域病院の代表者、杉並保健所に声掛けして新型コロナ対策を話し合う場を設けました。その後、杉並区が行政会議と位置付けた会議に発展し、現在も『杉並区新型コロナウイルス感染症連絡会』として月2回ほどのペースで情報交換を続けています。地域の病院・診療所ともにコロナ禍で業務に制限がかかるなか、それぞれの立場でできることを模索しています。病院は病院にしかできない役割を担うことが求められます。地域基幹病院の発熱外来や、区の集団予防接種会場にも診療所の医師が応援に出向くなどの取り組みを続けています。また、区の委託事業として休日夜間診療事業を行っている『杉並区休日等夜間急病診療所』に、荻窪保健センターの一角を借りて発熱外来を設け、診療・検査医療機関の申請を行いました。毎回の仮設診療室の設置や、医師・看護師・事務スタッフも従来の運用の2倍の配置が必要になるなど、多くの課題を抱えていますが、この夏の第7波では1日100名に及ぶ発熱患者さんの対応を行いました。新型コロナウイルス感染症に限らず、今後もこのような制約を受ける状況を見込んだ医療提供体制を地域行政と共に考えていかなければならないと切実に思っています。平日にセンター方式でコロナ患者さんの対応ができないか？という課題についても行政とともに検討してきましたが、診療所として専任の管理者が必要なこと（巡回診療所として登録するにしても課題が多い）、スタッフの確保、なにより

設置場所の確保が課題となっています。

高齢者医療・介護・福祉分野では、地域の病院、診療所、訪問看護ステーション、介護事業所等の顔の見える連携を図るべく、区内7圏域で『杉並区在宅医療地域ケア会議』を定期的に開催してきましたが、昨年も今年も対面での開催が困難となり、WEB形式での開催を試みているところです。利用者の方々と直接触れる場面の多い介護現場は、多くの困難を抱えていますが、Zoomなどのツールを利用しながら介護現場の率直な思い、これからの未来に向けての課題、希望などを語り合う会なども開催しています。杉並区のも職種医療介護連携システムであるバイタルリンク（杉介ネット）の構築、運用にも積極的に取り組んでいます。コロナ禍で直視することになった地域医療の課題について、診療所と病院、訪問看護ステーション、薬剤師会、歯科医師会、介護福祉施設、保健所との情報共有や協力がより一層大切であることを痛感しています。

会員向けの活動としては、学術講演会、診療支援の勉強会などのWEB・ハイブリッド開催、人数制限下での対面開催などを積み重ねています。以前のような会が跳ねた後の情報交換や会食などの機会が戻ってくる日を取り戻せるように願っています。また、保険部の理事が中心となって、会員向けに保険診療に関する情報交換を目的とした『診療報酬ヘルプサイト』も立ち上げました。初めは頻繁に運用が変わる新型コロナウイルス感染症の保険請求について、会員同士の質問と回答がメインになっていましたが、その他の保険請求事案についても情報共有し、全会員参加型のヘルプサイトを目指して奮闘しているところです。共催会では、新型コロナウイルス感染により休業を余儀なくされた会員への見舞金支給を開始しました。また、各委員会や病院と診療所の垣根を越えて、医師会・病院・保健所の共催で地域の感染症対策講演会の開催準備に取り掛かっています。

これからの地域医療は医療機関同士の競争・競合ではなく、それぞれの特性を発揮する協力・連携であるべきとの思いです。都民は居住区域を超えて多くの医療機関にアクセスしているため、圏域を超えての情報共有や、医療連携ツールの運用も欠かせません。各地区医師会の皆様にも、いろいろ教えていただきながら取り組んでまいります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

医師と医師会を結ぶ 情報紙

都医NEWS

2022

Vol.
680第31回
日本医学会総会 2023 東京ビッグデータが拓く未来の医学と医療
～豊かな人生100年時代を求めて～早期事前参加登録受付中
2022年10月31日(月)まで

事前参加登録者の特典として、事前webinar等の各種企画にご参加いただけます

- | | |
|----|---|
| 会期 | (学術集会) 2023年 4月21日(金)～23日(日)
(学術展示) 2023年 4月20日(木)～23日(日)
(博覧会) 2023年 4月15日(土)～23日(日) |
| 会場 | 東京国際フォーラム および 丸の内・有楽町エリア |
| 会頭 | 春日 雅人 朝日生命成人病研究所 所長
国立国際医療研究センター 名誉理事長 |

事務局

〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学医学部附属病院 中央診療棟2(8F)
TEL | 03-5800-8971 FAX | 03-5800-6412 E-mail | office@isoukai2023.jp<http://isoukai2023.jp/>